



実」という新書を日経の敏腕ワシントン元特派員が書いているが、プラザ合意直後の、米国の対日工作に自分は使われたと白状していた。すなわち日経も操作の対象としてうまく操られたているのだ。ある調査部に世界のあらゆる情報を取り、大学では経済学の勉強が3度の飯よりも好き。精緻に分析することにかけては天下一のアナリストがいた。彼はその優秀さを鼻にかけて、部下の扱いに問題があり、副官はこっそり正反対の結論を機会あることに開陳していた。上司は精密すぎてむしろすべて外して、逆に上司の議論の裏を發表していた副官は有名ストラテジストとして引っ張り尻となってしまった。

すなわち精密すぎてもむしろ外れる可能性が高いということだ。カジノのルーレットで、球出しの八百長と同じで、気合を入れ過ぎて隣の数字に玉が入るようなものだろうか。だからこそ投資の世界は楽しいのだろう。そして、吹けば飛ぶような会社があつという間に日本 GDP 規模と同じ時価総額になることもある世界だ。そんなワーダーランドで生き延びる話をさせてください。これこそはと信じるものがあつても、信じないそぶりで、“常に複眼で行こう”。

山本博幸記